

ニコラス・G・ハイエック センター

正会員 坂 賀 茂 君
正会員 平 賀 信 孝 君

銀座・中央通りに面するニコラス・G・ハイエック センターは、時計ブランドグループの店舗を兼ねた本社ビルである。地上 14 階の搭状建物で、近づいていくと白いフレームの巨大な開口越しに 3 層一組の深い奥行きのアトリウムが見て取れ、それが 3 段に積み上がった光景がまず目に飛び込んでくる。一方足元は、昇降するショールームや、装置ごと地面に消える機械駐車を装備することで、1 階に集中してしまう要素群の分散と裏通りへの通り抜けとを両立させ、緑や滝の演出と相まって、魅力的な散策路を街に提供している。

上階に上ると、アトリウムの外側には 3 層分を昇降するガラスシャッター、内側テラスには女性でも簡単に引き出せるガラス障子があり、それぞれを気候や時刻に応じて開閉することで、中間のボイドは内外部の二面性を持つ縁側空間として環境がコントロールされている。アトリウムの天井は西向き大きな開口に庇状に深く迫り出し、陽光が差し込む南向きの緑化壁は垂直の庭となって天井に昇っていく。風のそよぎや地上の喧騒が微かに感じられ、銀座の空を見上げ街を見下ろす来客は、不思議な浮遊感の空中庭園を体感する。

銀座特有の間口の狭さ、両隣との近接等の制約下で、足元から上階全体に及ぶ大胆な空間的開放をシンプルな薄い躯体で実現しえたのは、床の自重を重りとして利用するマスターパー制震装置の組み込み等、構造的構成と建築的構成の統合によるところが大きい。路線価の高い銀座では道路際での専有面積の最大化が定型的命題となるが、ここではむしろ希少価値としてのボイドとセットバックをあえて多用し、外気に開放した 4 つのポケットパークを縦積みにした立体街路に見立てることで、路面にない上階の接地性の解決としている。

さまざまな装置類はそれ自体が街に動きのある表情を発信しているが、同時にそれは動と静の対比を際立たせ壁面の存在感を自在に操ることで、人工地盤状の大きな構成を軽やかなフレーム表現で街並みに挿入することに成功している。空中のアトリウムというコンセプトは、銀座ならではの特殊解とも言えるが、従来の商業ビルの概念を一変させたその手法は、街とのコンテクストの中で建築と都市を緩衝装置で繋ぎ、単体と街並みの魅力を共に活かすあう一つの典型例を実現しているという意味で、新たな建築の可能性を示唆するとともに、都市に対する社会的、文化的なビジョンを提示していると言えよう。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。